

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2014年1月 NO.177



[もくじ]

- 2～3 世界八十八カ所音楽巡礼の旅…西村直記
- 4～5 高知出版学術賞その後② 天然アユを増やす その光と陰…高橋勇夫
- 6～7 子どもの成長とアートへの役割…増田和剛
- 8～9 日曜市活性化の取り組みについて…渡辺芙月
- 10～11 言葉の現場から43 ロンドン乞食のなぞ③…広井護
- 12～13 高知市文化振興事業団11月～12月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「はなつゆ」古味望

公益財団法人高知市文化振興事業団

世界八十八カ所 音楽巡礼の旅

西村 直記

「バサツ、バサツ」。未明に水をかぶって始まる私の一日は、十八道理趣経など、約一時間半の祈りへと続きます。「この世のすべてに光を照らし、心を浄化し、世界が平和になりますように。人も心も魂も、自然さえも安らぐような音楽をつくらせたまえ」と。

それまで信仰心など皆無に近かった私がこのように変わったのは、家族の事故という予期せぬ出来事がきっかけでした。三十歳のとき、四歳の長男と妊娠五カ月の妻が五メートル下の奈落の底に転落。「助かないかもしれない。助かったとしても一生寝たきりかもしれない」と医師に告げられました。



ローマ法王パウロ二世との謁見

者に言われ、目の前が真っ暗になりました。当時、愛媛大学講師をしながら自宅で開いていた音楽教室では、四十人の生徒の半分がやめるという経験もありました。きびしい指導の行き詰まりのせいもありました。人間として音楽家として教育者としても、大きな挫折を味わいました。

現実から逃れるように、幼いときから慣れ親しんでいた近くの第五十一番札所石手寺を訪れたとき、線香の煙に包まれ、手を合わせながら一生懸命に拝むお遍路さんの姿を見ているうちに、私自身も不思議な光をみて、家族と自分自身を何とか助けてほしいという思いから、四国巡礼を始めました。

お寺を訪れるたびにイメージがわき、それぞれに曲を作り、巡り終えた七半年後には、九十曲からなる霊場組曲『四国八十八カ所』を完成させました。のちに、『NHK』心を旅する四国八十八カ所』で放映されました。

おかげさまで、妻は脊髄を破損したものの一命をとりとめ、長男は重度の身体障害者になりましたが、現

在はエストニア国立音楽院大学院作曲科を経て、国立エストニア男声合唱団に所属し、合唱と作曲をしています。国際作曲コンクールでも金賞を受賞しました。

一九八八年二月三日、結願への感謝と奉納コンサートをお願いすべく、雪深い高野山を初めて訪れました。このとき、奥の院の静けさ、宗教や地位、国籍などあらゆるものを越え、すべてを受け入れ大きく包み込む懐の深さや、そこに入ったものすべてが仏になれるという根本大塔など、私たち夫婦にとっては大きな感動でした。

その後、打合せで何度か訪れるうちに、「高野山は四国八十八カ所の到達点でもあるけれども、新しい出発点でもあるのでは」と気づき、ここを起点に「世界の平和と鎮魂の旅、世界八十八カ所音楽巡礼」への旅を発心し、そのためのコンサートを一九八八年九月、高野山根本大塔の中と外を使ってさせて頂きました。その様子は、YouTube で見ることが出来ます。(http://www.youtube.com/watch?v=kwG24t0VSA)

広島 (http://www.youtube.com/watch?v=I2p86xT0E)、ハワイ真珠湾、ベルリンの壁、日本人として初めてバチカンにてローマ法王の前での謁見演奏、イスラエルのベレス首相の前での演奏、日中外交回復二十周年記念で洛陽に招かれ演奏、NYカーネギー・ホール、中国の万里の長城や南京大屠殺地、長崎、沖縄、イン

下などを経て、二〇〇九年九月、朝鮮半島三十八度線・統一展望台で世界八十八カ所音楽巡礼の旅のファイナルコンサートを開催しました。

続いて二〇〇一年五月、NY国連本部での平和コンサートを皮切りに、第二次世界音楽巡礼をスタートし、チベット、サイパンの広島長崎原爆搭載機発進基地テニアン、えひめ丸慰霊碑、台湾、北京、米国などを巡り、二〇一三年八月西安で八十八カ所目を終えました。

九月十三日、二十五年かけての世界音楽巡礼結願の報告のため高野山を訪れ、根本大塔と奥の院に赴き感謝の祈りをささげました。(http://www.youtube.com/watch?v=KN0Lduxy9Y)

世界巡礼を振り返ってみて、とても不思議なものを感じています。すべて自費、借金も一億円を超えていましたが、家を売却したりして、おかげさまで今日までなんとか無事に過ごすことができています。

一九八九年十一月、ハワイ大学に招かれ、日本の国際交流基金の協力で初めての海外コンサートを実現した際、コンサート終了後、観客のみならず涙を流しながら、総立ちで拍手をして頂きました。このとき、「私の音楽でも、感動して頂けた！」と、逆にこちらが感動しました。

そして、十二月八日ハワイ真珠湾攻撃の日、ハワイのパンチボール(太平洋国立記念墓地)で日本から同行した六百人の人々とアメリカ合衆国代表や州知事、日系部隊の人

たちなど、合計千五百人の方たちと音楽法要を営みました。夜、真珠湾で高野山の奥の院に千二百年灯し続けられている灯と、広島平和公園の平和の灯と、伊予十三仏霊場会の灯を、千八百個に献灯し平和と鎮魂の祈りをささげながらの音楽法要でした。

一九九六年放送されたテレビ東京の一時番組『ドキュメンタリー人間劇場』では、映画界の巨匠故若松孝二監督が唯一撮ったドキュメンタリーが西村直記でした。中国への巡礼では、天安門や盧溝橋、万里の長城、南京を口けました。南京では、両親を日本軍に殺された中国人ドレイバー(北京中央テレビのスタッフ)が急に怒り出し、「これまで南京には、政治家や歌手や踊り手などたくさん日本人が来たが、みんな偽物だった。お前も同じだろう」と言われました。そのような声のなか揚子江のほとりで五万人もの中国人が虐殺され周辺が血に染まり、一週間以上血の色が消えなかつたという河辺で、人間への怒りと哀しみと慰霊の祈りを込めた演奏を行いました。終わつた後、彼は泣きながら、何度も何度も度々ありがとうと言いつつながら感謝してくれました。

そのほか、バチカンにおいてローマ法王の前での謁



万里の長城で演奏

見演奏やイスラエルのベレス首相の前での演奏、ユダヤ人とアラブ人の両親が戦いで亡くなり残された子どもたちが共存共生しているベルシャロームの小学校でのコンサート、朝鮮半島の三十八度線や、NY国連本部での平和コンサートなど、数えあげればきりがありませんが、どうして実現できたかわからないほど不思議なことばかりです。阪神大震災のとき神戸ポートピアホテルの二十七階で被災しましたが無事でした。一カ月後には神戸での慰霊コンサートや、ハワイ・ハンコックたちと残された人たちのためにコンサートなども行いました。

これまでいつも思ったことは、「有名でもなく、お金持ちでもなく、人格者でもない私のようなものが、なぜこんな人生を歩むのか? もっと素晴らしい人が他にいるのでは?」でした。それでも私は、何かにつき動かされるながら、音楽の力を信じひたすら人の心に訴え続けています。

さまざまな出会いのなか、大正末期の天才童謡詩人金子みすゞとの出会いは、「童謡は家族みんなが一緒に歌える曲であり、親から子、孫と三世代がここを共有できる偉大な曲」と気づかされ、高知県安芸市旧畑山小中学校にスタジオを移設し、七年かけて全五百十二編すべてを作曲しました。

宿毛市は、西村家代々私の父までの出身地というご縁もあり、ジョン万次郎を描いたCD『漂流』や、高知新聞創刊百周年記念で坂本龍馬を



筆者

描いたCD『龍馬 F O R E V E R』、「龍馬の手紙を読む」朗読CD & DVD の作曲制作「よさこいまつり」への楽曲提供などもさせて頂き、深く感謝しています。(http://www.youtube.com/watch?v=QGF1238wKs)

金剛流御詠歌では、現存する百五十曲余りを高野山から依頼され、編曲録音しました。

訪れた地では、風のささやきをはじめ、木々や鳥や自然が語りかけ、そのメッセージを音楽にしています。「この世のすべてに光を照らす音楽、遍照光の音楽」作りを、これからも目指していきます。

いろいろな作品作りの機会が与えられていることに感謝しながら、数多くの作品や世界音楽巡礼の作品のほとんども、まだみなさまにお聴かせできていないのが残念ですが、頑張りたいと思っています。

最後に、音楽巡礼は、生命ある限り続けていきたいと思えます。

「戦火の傷痕深い大地、いまなお戦争の絶えぬ国々、人々が癒されぬところの痛みを抱き暮らすところほど、自然が饒舌なのです。そのメッセージを追いかけているうちに、一

周だけと始めた音楽巡礼が、二周になった。でも、まだまだ自然は語りかけてくることを止めない。」 九拝

にしむら なおき

一九四九年 愛媛県松山市生まれ
作曲家、シンセサイザー奏者、世界でたったひとりの音楽巡礼者
東京藝術大学卒業、愛媛大学講師を経て、廃校となっていた高知県安芸市旧畑山小中学校にスタジオをつくり、金子みすゞの全詩五百十二編の作曲をはじめ、広島、真珠湾、ベルリン、南京など世界中の悲劇に見舞われた地を訪ねて、レクイエム(鎮魂曲)や平和音楽の作曲・演奏を行っている。
二〇〇九年九月、高野山を出発点とした世界八十八カ所音楽巡礼を終え、二〇一一年五月、NY国際連合本部での演奏を新たな出発点として、新世界八十八カ所音楽巡礼を開始、二〇一三年八月西安で巡り終えた。カーネギー・ホールを始め、ローマ法王への謁見演奏をまとめたCD『宇宙巡礼』やDVDユネスコ公認ビデオ『世界遺産』『NHK』心を旅する四国八十八カ所』の音楽担当や映画・TVなど多岐にわたって活躍。人々の平安を願いながら、精魂込めて自作の音楽を世界各地に奉納している。

高知出版学術賞その後②

天然アユを増やす その光と陰

高橋 勇夫

初めての著書『ここまでわかったアユの本』が思いも掛けず第十七回高知出版学術賞を受賞した。その授賞式で次のようなことをお話しさせていただいた。

「私は二十年ほどアユの生活史の基礎研究を続けてきました。その研究はアユを守ったり、増やしたりするため役立つと考えていたのですが、研究を続けてきた二十二年間、その思いとは逆に日本から天然のアユが大きく減少しました。その現実、アユを守るためにはアユを知るだけではダメで、それを活かす技術が必要であることを教えてくれました。これからは、これまでの基礎研究をベースに実際にアユを増やし、地域でそ

れを持続的に活用できるような仕事をしたいと考えています」。

学術賞をいただいた二〇〇六年当時、私は県東部を流れる奈半利川で天然アユを増やすための調査に取り組んでいた。奈半利川には昭和三十年代に魚梁瀬ダムをはじめとする発電用のダムが三つ造られており、昭和六十年代にはダムによる濁水の長期化が社会問題化したこともあった。また、ダムは水を溜めるだけでなく、山から海に運ばれて行くはずの土砂も溜めてしまう。ダムの下流では洪水の川底に残ったのは大きな石ばかりという状態になっていた。

アユは浅瀬の小砂利の中に卵を産み付ける習性がある。小砂利がなくなると奈半利川では産卵がうまくできず、そのことが奈半利川からアユが減少した主な原因となっていた。まず取り組んだことは、人工的に産卵場を造ることだった。この作業は本来であれば漁協がやるべきことなのだが、産卵ができない原因はダムにあることが明らかであったため、ダムを利用している電力会社に環境対策の一環として全面的な協力をお願いした。

アユの産卵直前に川に重機を入れ、川底を攪拌した後、そこに小砂利を敷き詰める。産卵環境が荒廃した奈半利川では、人工産卵場



奈半利川でのアユの産卵場造成



造成した産卵場ではアユが活発に産卵する

して、大量死による回帰率の悪さをカバーする対策を追加した。これらの対策は次第に効果を発揮し、親の数が安定的に増え始めた二〇〇九年以降、遡上量もやっとな増加傾向に転じ、その後も年々増加傾向にある。近年は、奈半利川に天然アユが多いことが知られるようになり、県内外からの釣り客が増えている。

望んだ成果が得られた一方で、新たな課題も見えてきた。産卵場を造ることは果たして正しいことなのか？ 造らなければアユが産

卵できなくなることは事実だし、その効果が絶大であることも事実なのだが、アユだけ増えれば良いのかという批判はいつもいたたく。川の中に重機を入れることで、他の生き物の命を奪ってしまうことも少なからず起きている。そもそも、産卵場造成は対症的な手段に過ぎず、抜本的な対策とはなれない。こんな作業を永遠に続けるのか？ 自分の中でも大きな疑問となってきた。

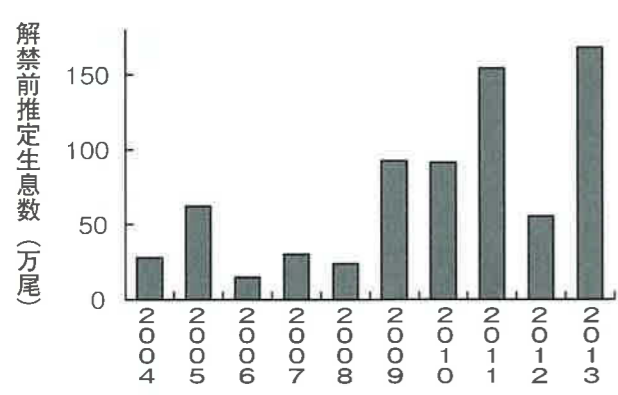
究極の解決策を求めるとすれば、ダム撤去にまで行き着く。しかし、その中間にダムとアユや河川環境が並び立つことのできる方法はないのだろうか。例えば、ダムに溜まった小砂利を下流に流すことができれば、ダム下流の環境は大きく改善することになる。ただ、そのような対策も多大な費用が掛かるため、すぐにできる対策とはならない。

理想と現実の大きなギャップの中で、ともかく必要と思えるうちは産卵場を造り続けると決めた。そして、産卵場造成を美化しないこと、造成によって生じる負の側面から目をそらさないことを決めた。目をそらさなければ、いつかは新たな解決策が見えてくると信

まれたアユ—これらは数的に多い—が大量死を起こしていたのである。主群が大量死を起こしたのでは、遡上量が増えないのも当然であった。

手前味噌になるが、この現象は異例なほど早く明らかにできた。二十年続けてきた基礎研究の中で、四万十川でも同じような現象が起きていることをすでに把握していたからである。

原因が分かったので、早速、産卵期を遅めにコントロールする対策と、親の数⇨仔魚の数を増や



たかはし いさお
一九五七年 高知県生まれ
たかはし河川生物調査事務所代表、
農学博士。アユの生活史の基礎研
究をベースに、全国各地の河川で
天然アユを増やす活動に取り組ん
でいる。主な著作『ここまでわかっ
たアユの本』、『天然アユが育つ
川』、『アユを育てる川仕事』(い
ずれも築地書館)、『変容するコモ
ンズ』(ナカニシヤ出版)。

二〇一三年十一月、今年も奈半利川にアユの産卵場を造った。多くのアユが産卵に集まってきてやがて死んでいく。その死体を食べるためにトンビ、シラサギ、カワウ、カラスなどたくさん鳥やスズキなどの魚も奈半利川に集まってきている。アユが増えたことで、それを食料とする多くの動物たちも増えているのかもしれない。アユを増やすことが人のためだけではないという事実に励ましてもらっている。

じたい。

子どもの成長とアートとの役割

増田 和剛

私たちの生活環境は日に日に進歩を遂げ、携帯・スマホといった端末機器が、コミュニケーションの道具として大人の世界だけでなく子どもの世界まで進出してきています。この現実を背景に、日々の生活をアートというフィインダーを通して見て、子どもたちの心を育てる感性の部分の成長について考えたとき、今何が一番子どもたちに必要なのか検証してみたいと思います。

近頃の子どもたちはイメージする力が弱まっていると言われることがあります。この問題には、いったいどんな原因があり、また、解決方法は存在するのでしょうか。例えば、小さな子どもが大きな木の絵を描いたとします。その木には、ふさふさとした葉っぱが茂り、実まで描かれています。この木を支える

大きな根の存在が描かれていません。子どもは、まず大きな木が描きたかったのだと推察できます。ここに、近頃の子どもたちに空間感覚が非常に乏しく、どちらかといえば平面的で、立体的な形をイメージするのにしばしば時間がかかってしまうことの現状が伺えます。では、この大きな木の根をイメージすることができると子どもになるために何が必要なのでしょう。

一つの要因には、自然にふれあう経験が少なく、汗をかきこともない、視覚的な経験の方が多くなっているのではないかとこのことが挙げられます。これからの時代を担っていく若い世代の子どもたちにとって、汗をかき自然を体験できる経験の重要性は誰もが分かっていることです。しかしながら、あえて体験の場をセッティン

グしなければ実現しない現実、自然体験を求める難しさを感じます。また、昔は日常生活のなかに自然とふれあう機会が普通にあり人々との交流も今よりもずっと多く、コミュニケーション不足という言葉すらなかった時代でした。今は人の五感を刺激する自然体験を通じて、コミュニケーションを学ぶとか、お互いの顔が見える『Face to Face』という言葉をよく耳にします。そこまで整えてあげないとコミュニケーションは図れないのでしょうか。いまの子どもたちにとってコミュニケーション能力を身につけさせるために、表現することが大切だと、様々な活動をするために実感します。ここで一つの実践として空間を変化させる壁画制作の取り組みを例にとりあげ、コミュニ

ケーションと表現することの可能性について提案したいと思えます。

この壁画制作の空間感覚は、人の集まる学校生活そのものを絵に描くように、人間模様も同じく表現し描きだせるのです。一人の子の存在を大事にすることによってその子の周りの子どもたちの存在感も変化します。また、全体的な空気が個人に影響してきます。ここに見られる関係こそ、表現することの重要性とコミュニケーションの可能性という部分で、非常に大切なものとなります。お互いを大事にしていくことによって、新聞紙上で報道されている社会問題



アートを通じて子ども達の成長を見守る

も少なからず解決していくのではないかと確信しています。

ここで考慮すべきところは、空間を変化させる壁画制作は、殺風景な空間を一気に明るく活気づけてくれる手段として、それまで存在していた空間を一変させてしまうほど大きな責任を負っていかなければならぬということ。壁画制作は路上に描かれたスプレーの落書きではありません。落書きをすることによって、その周辺の景色や空気が変わってしまう。そのまを通過する人の心まで変化させてしまうくらい大きな変化です。このように、空間づくりを考えると、学校のような小さなくりくりではなく大きなくりくりとしての社会のあり方にも目を向けていかなければなりません。



商店街のシャッターをキャンパスに制作 (龍河洞商店街)

互いに影響し合える自分であることで、希薄になってきている人間関係をよりよい形に変えていくきっかけづくりではないかと思えます。さて、冒頭に書いた大きな木の話にもどします。あ

では、この空間感覚はどこで身につければいいのでしょうか。表現するために必要なイメージと空間感覚との接点は果たしてどこにあるのでしょうか。それは、基本的には生まれ育った環境の中で、経験を通じて体感した感性こそが、イメージ力と重なったときにはじめて現実的な形として現れるのではないかと考えられます。

将来の選択を余儀なくされたときに、イメージを表現することよりも現実問題を優先し、自分らしさを失い、そして、あげくの果てにはイメージにつながらないという大人になってしまう恐れもあります。子どもの成長の中で第一に必要なことは、自分を表現する力と形にするイメージ力、そして、その自分を取り巻く環境の中でお互いに影響し合える自分であること



倉庫を華やかに変える (高知幼稚園)

人間があまりにも豊かになりすぎ、便利さになれてしまったばかりに到達するのです。

りに、人間が保有する機能を使うことなく、便利な端末機器の機能を優先した日常生活を営んでいる現実と非日常的になってしまった自然体験やコミュニケーションの重要性に、あらためてアートを通じて切り込んでいかなければならない責任を感じます。



トイレの大きな壁一面を使って制作 (高知幼稚園)

ますだ かずたか

一九六九年 高知県生まれ
高知中高等学校美術教諭。

日曜日活性化の取り組みについて

渡辺 芙月

高知市の中心、追手筋で毎週開かれていた日曜日。三百年以上の歴史を持ちその距離は一・三キロ。現存する街路市の中では最古かつ最大だといわれています。五年前、日曜市で販売体験などを行う授業を受講していた、当時一回生の先輩は半年間の授業が終了した後、もっと日曜日と関わりたいたいという思いからSunday Market Supporterという学生団体を立ち上げました。高知市の助成金を申請したり、市役所との連携を図って活動の幅を広げ、現在に至ります。主な活動内容は、出店者サポート・観光案内・休憩所運営の三つです。

出店者サポートとしては、高齢の出店者さんに代わって日除け張りをお手伝いしたり、忙しいお店や、用事で少しお店を空ける出

店者さんに代わって店番をさせて頂いたりします。スーパードは決定的に違うところ、日曜日には常に会話があります。出店者さんと会話をしている時間は、私にとって最も大切にしたい時間です。活動に入りたての頃は、先輩とお知り合いの出店者さんの所に連れて行って頂き、少しずつ繋がりを作りました。活動に慣れてきた頃から、市場を積極的に歩き、話したことのない出店者さんと話すように心がけました。野菜の育て方やレシピを教わったり、先輩として人生相談をしたりすることも：話す話題はいくらでもあります。出店者さんの中には、一回お話しただけで、以来ずっと声をかけてくださる方や、「孫と話しているようで楽しい。」と言ってくくださる方もいて、私自身の楽しみである

のに加えて、出店者さんの活力に少しでも繋がってあげたいと思っています。日曜日の中だけに限らず、出店者さんの畑に直接邪魔して作物の収穫等をお手伝いさせて頂いたこともあります。日曜日には一日あたり一万五千人が訪れており、近年増加しているのが観光客です。そこで私たちは、市役所から二つのテントを借りし、パンフレットを設置して観光スポットや食事処を案内しています。普段は目もくれずに通り過ぎるはりまや橋、観光客がほとんどの坂本龍馬像と桂浜、日曜市から見上げているだけだった高知城、四万十川……。観光案内をするようになってから、知らないことが多いことに気づかされ、少し視点を変えて街を見るように心がけました。



観光案内では、自分の知らない高知に気づくことも

おりに発表することで精一杯。しかし、活動を続けてプレゼンの経験が増える毎に、緊張はするものの、少しずつ自分の言いたいことを話せるようになりました。

観光案内の隣では、お年寄りや小さい子どもさん、市で買ったものをゆっくり食べたい方などの為に休憩所を設置し、夏には冷たいお茶のサービス、冬にはこたつをおいて、市場をより快適に楽しんでもらえるよう工夫しています。

その他日曜市を活性化するため、様々なイベントも行います。日曜市の食材を使った弁当の販売は、話題性による集客、市の食材を使うことによる日曜市の売上アップ、新鮮な野菜を持ち帰ることができない観光客や出店者さんの昼食などを目的に行い、すぐに売り切れてしまう程の人気ぶりでした。その後も、日曜市の今後の継続・発展について話し合うためのシンポジウムの開催、英語版日曜市マップ作成、高知大学の学祭にて日曜市の食材を使ったスープレの販売など様々なことを行いました。

さらに、私個人としては今年の夏、活動の一環でイタリアに留学をしました。市場の発祥地であり、

スーパーマーケットがある現在でも、人々の生活に市場が密着している国。日曜日との違いを自分の目で確かめ、イタリアの市場の良さを知り、日曜市を客観的に見る貴重な機会となりました。

また、十月には一回生による日曜市スタンプリリーが企画実施されました。この企画は、参加したお客さんが日曜市内の六店舗で買い物をする、日曜市内で使える商品券や、日用品をプレゼントするというものです。近年減少している地元客に対し、これをきっかけに日曜市に足を運んでもらえたら、若者にも市をもっと楽しんでもらえたらと考えました。一カ

月で七十名以上の方の参加があり、子どもさんがゲームのように楽しんでくれたり、「また来週も来ると言ってくれたい人がいたり、ね」と言ってくれたい人がいたり、「これからもやって欲しい」との声も頂くことができました。しかし、出店者さんに企画の内容がしっかり伝えられていなかったことを含め、不十分な点もいくつか挙げられました。私たちが活動をする上では、その目的や内容を全出店者さんや市役所の方、お客さんに理解と協力をして頂くことが必要となります。どうすれば伝わるのか、どんな宣伝をすればお客さんが来てくれるのか、出店者さんが私たちに求めていることは何



出店者さんに代わっての店番

か：毎週の活動や企画の度、メンバーで話し合い試行錯誤しています。

私は、地元高知県が好きで、地域を活性化したい、という思いから高知大学に進学し、この団体に入りました。活動を続けていく中で少し意識の変化がありました。それは、日曜市を元気にするという単なる地域活性化だけではなく、そこにいる出店者さんの力になりたいという思いです。授業では学べないこと、出会えない人、経験。出店者さん一人ひとりと毎週お話ししたり、イベントを開いたり、日曜日という高知にしかないフィールドで、私たちにしかできないことはたくさんあるはずですが、原点となる出店者サポートを大切に、これからも活動を続けていきたいと思っています。日曜市に来た際には、ぜひ私たちのテントにお立ち寄り下さい！

わたなべ ぶづき

一九九三年 高知市生まれ
高知大学人文学部社会経済学科
二回生、Sunday Market Supporter
代表。

ロンドン乞食のなぞ③

今回をもって、芥川龍之介「父」の授業紹介の最終回としたい。友人達の面前で父親を「あいつはロンドン乞食さ。」と言いつつ...

今回は、上野駅へ向かう路面電車に乗り込んだ「自分」に、主人公の能勢が声をかける冒頭の場面を取り上げる。

自分が中学校の四年生だったときの話である。一略

こみ合っている中を、やっと肩皮にぶらさがると、誰か後から、自分の肩をたたく者がある。自分は慌ててふり向いた。

「お早う。」
見ると能勢五十雄であった。一略

能勢は、自分と同じ小学校を出

いということは、勉強では特徴がなかったことだ。それなのに、勉強を最初に話題にする、そうせずにはいられないことは？」

P「『自分』は、勉強人間。」

P「勉強のことに一番関心がある。」

T「そうなんだ。『自分』の見方には偏りがある。『自分』のバイアス(偏見)をはずして、直接みんなの目から見たら、能瀬ってどんな奴？」

流行歌をすぐ覚えて、詩吟、薩摩琵琶ができるっていうのは、今だったら音楽センス抜群ってことだ。カラオケもうまい。」

落後、講談、声色(ものまね)ができるっていうのは？」

P「ギヤグがうまい！」

P「笑いを取るのがうまい。」

P「面白人間。」

T「その上、手品——マジックまでできる。こういうやつがみんなの中にいれば？」

P「人気者。」

P「ヒーロー。」

T「だよ。面白いことなら何でもできるんだ。ところが、詩吟、薩摩琵琶(今でいえばエレキギターだ)、落語、講談、声色、手品、こういう能瀬の特技を『自分』は、どう評価しているかな。すごいなあって感じしている？」

P「していない。」

T「本文のどこからわかる？」

て、同じ中学校へはいった男であつた。これと云つて、得意な学科も云つて、得意なものもない。その癖、ちよいとした事には、器用な性質で、流行唄と云うようなものは、一度聞くと、すぐに節を覚えてしまう。そうして、修学旅行で宿屋へでも泊る晩なぞには、それを得意になつて披露する。詩吟、薩摩琵琶、落語、講談、声色、手品、何でも出来た。その上また、身ぶりとか、顔つきとかで、人を笑わせるのに独特な妙を得ている。従つて級の気うけも、教員間の評判も悪くはない。もつとも自分とは、互に往来はしていながら、さして親しいと云う間柄でもなかつた。

能勢と語り手「自分」の人物像を読み取り、その関係性をとらえる授業を紹介したい。Tは私、Pは生徒である。

T「互いに往来はしていながら、さして親しいという間がらでもな

P「その癖、ちよいとした事には、器用な性質で」つてあつた後、詩吟、薩摩琵琶と続くから、能瀬の得意なことは「ちよいとした事」だとしか思つてない。」

T「その癖、ちよいと...」の「その癖」ってどういうこと？」

P「勉強という大事なものは、ふつうなのに、くだらないことでは、けつこうデキル奴、みたいな。」

T「つまり、能瀬と『自分』は価値観が違う。生きている世界も違う。能勢にとっては、面白いこと、ウケることが価値であり、『自分』にとっては、勉強が最重要事なんだ。二人には接点がないんだね。だから、『さして親しいと云う間柄でもなかつた。』ということになるわけだ。」

確認だけ、じゃ、どうして行つたり来たりしてたの？」

P「家が近いから。」

T「そうだね。たとえば、どちらかが風邪で学校を休んだときに、宿題を届けに行つたりとか、ノートを写させてもらいに行つたりとか。そういうレベルのつきあいだったんだ。」

「自分」は能瀬の家と往来していた。だけど能瀬と「自分」には心理的な距離があつた。この距離感がクライマックスの語りで決定的な役割をする。

「来た。」つて書いてあるね。「往來」ってどういう意味？」

P「行つたり、来たりすること。」

T「そうだね。能勢と『自分』は、お互いの家を行つたり来たりしていた。ところが、『さして親しいという間がらでもなかつた。』と書かれてる。これ、ちよつと変だね。さして親しい間がらでもなかつたのに、どうしてお互いの家を行つたり来たりしていたの？」

P「.....」(答えられない。)

T「じゃ、問い方を変えよう。能瀬と『自分』が、家を行つたり来たりできたのは、ある条件があつたからなんだ。その条件って何？」

P「.....」(答えられない。)

T「自分が中学の四年生だった時の話である。」とこの小説は始まっている。能勢も自分も中学四年生だった。中学四年の生徒なんて、みんなのまわりにはいないでしょう。彼らに通つている中学校はどういう学校？」

P「旧制中学校。」

T「そう、今とは違う旧制中学校だった。旧制中学校って、昔のエリート学校だ。多くの子どもは小学校や高等小学校を出るとも働いていた時代。めぐまれた一部の子ども達だけが五年制の中学校へ進学したんだ。だから校区は広く、たくさん小学校から生徒は進学

能瀬と「自分」が一心同体みたいな友達関係だったら、能瀬が「あいつかい。あいつはロンドン乞食さ。」と言つたとき、まわりの友達といつしよに笑いころげていたかもしれない。あるいは逆に、笑いの標的が能勢の父親だと知つてしらけ返つたかもしれない。どちらにせよ、能瀬の心中を洞察することはできなかったらう。

能勢を取り巻く昂揚した空気から心理的な距離をおいていた「自分」だったからこそ、父親を友人達の前で「ロンドン乞食」と言わざるをえなかつた能勢の苦しい胸中を、まざまざと想像できたんだと思う。」

ところで、小説「父」は以下のよう

能勢五十雄は、中学を卒業すると間もなく、肺結核に罹つて、物故した。その追悼式を、中学の図書室で挙げた時、制帽をかぶつた能勢の写真の前で悼辞を読んだのは、自分である。「君、父母に孝に、——自分はその悼辞の中に、こう云う句を入れた。」

T「ところでなぜ悼辞を読む役を『自分』がやることになつたんだらう。」

P「小学校が同じだったから。」

してきた。これがヒントです。P「そうか。二人は家が近かつた同じ小学校の出身だから。」

T「そのとおり。『能瀬は自分と同じ小学校を出て同じ中学校へ入った男である。』と書いてある。上野駅へ行く電車にも、二人は同じ駅から乗り込んで会話している。つまり、家が近いんだ。だから、行つたり来たりしていた。」

じゃ、どうして「さして親しいという間がらでもなかつた。」の

P「.....」(答えられない。)

T「『自分』は、読者に向かつて能瀬の人物像を紹介しようとしているんだけど、最初に言つたのはどういうこと？」

P「能瀬には、得意な学科はなかつたが、苦手な科目もなかつた。...」

T「そうだね。これもちよつと変だね。みんなが、友達の人物像を第三者で紹介しようとするとき、彼には得意な科目もないけれど、苦手な科目もない、なんてことを最初に言うかな？」

P「言わない。」

T「じゃ、どんなことから言う？」

P「得意なものとか。」

ここから先生の主観的読みを言おう。「自分」は能勢のクラスの級長だったんだ。成績がよかつたからね。昔は成績の良い生徒が級長になつた。だから、悼辞を読むことになつたんだ。憶測するに「自分」は、芥川龍之介その人だ。

芥川龍之介の実母が精神を病んでいたことはよく知られている。「僕の母は狂人だった。」という言葉から始まる小説もある。

芥川は、実母のことを人に知られることを常に恐れていたという親に対する強いコンプレックスがあつた。だから、友人の前で親を隠さざるをえなかつた能勢五十雄(実在した人物と言われる)の気持ち

「父」は、フィクションとは思えないリアリティを持った作品である。

ひろい まもる
一九五四年 高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中高等学校に勤務。国語の教師。

リージョナルシアター モデル事業

この事業は、財団法人地域創造の助成を受け、演劇を通じた創造性豊かな地域づくりを目的に行うものです。本年度はモデル事業として、長野県上田市、愛知県豊田市、高知県高知市の三地域で開催され、高知市では、中央で活躍する演出家を招き、平成二五年十一月二十一日から二十四日までの四日間、学校へのアウトリーチや地元表現者への指導、関係者向けのインリーチを行いました。

事業初日は、高知市立第六小学校にて、劇団田上バル主宰の田上豊氏によるワークショップを開催しました。対象の四年生三十二人はとても楽しみにしていたようで、会場に入ったときから興味津々、あつという間の九十分でした。「伝える・演じる・助け合う」を軸にしたプログラムで、最後の創作・発表では、普段あまり自分の意見を言えない児童も意見を出し、グループごとに協力してアイデア溢れる作品に仕上げていきました。

二日目は、高知市立行川中学校の一年生から三年生までの全生徒二十三人を対象に、東



楽しく、そして真剣に取り組む児童
(第六小学校)

京デスロック主宰、キラリふじみ芸術監督の多田淳之介氏によるワークショップを開催しました。思春期の中学生は、会場に入ってきてからもグループで集まった小学生と違ってスロースタートのように感じられました。しかし、多くのワークショップ経験を持つ多田さんは、生徒の様子を見ながらプログラムを進め、徐々に生徒を引き込んでいきました。終盤は全員がまとまって一つのものを作り、短時間で大きな変化が見られました。

ワークショップ後に行った給食交流での会話からも、一見するとシャイな子どもたちが大きな関心を持っていて、伝わってきました。

三日目は、田上さんによる文化ホール・教育関係者向けのワークショップを高知市文化プラザかるぽーとの軽運動室にて開催し、十四人が参加しました。本事業担当も参加しましたが、言葉を使わず意思疎通する難しさや、考えが伝わる喜びを体験でき、とても有意義に感じたプログラムでした。

事業最終日は、高知で演劇に携わる人たちで作ったワークショップに一般公募で集まった小学四年生から六年生の



イメージを共有し、大きな「?マーク」を作る (行川中学校)

二十人が参加しました。参加者は、ほとんどが初めて会うことも同士でしたが、多少衝突しながらも同じイメージを共有したり、失敗したときにハイタッチをしてお互いを認め合ったりし、人とのつながりが希薄化する中で、よい体験になったのではないのでしょうか。プログラムの最後は全員が協力して発表を行いました。最終日のワークショップは、地元表現者が夏から試行錯誤を繰り返して、この四日間が多田さん・田上さん・地域創造の方からたくさんアドバイスをいただいた作りあげたものです。

本事業を通じて感じたことは、一見スムーズに進行するプログラムは、実は一つの目的に向かい、時間をかけて綿密に作り上げられたもので、またワークショップの現場では、子ども達を全て受け入れる、繊細で情熱的な指導者の人間力がないよりも大切だということでした。

地域の表現者とともにワークショップの本質を学び、ひとつのプログラムを作り上げたこの貴重な四日間、来年以降もさらに力を合わせてこのプログラムを進めていきたいと思えます。



相手の気持ちを想像しながら、協力して一つの形を作る (公募ワークショップ)

美術中級講座 スキルアップカリキュラム

県内の美術分野のレベルアップを目指して、経験者の方を対象に開催している「美術中級講座スキルアップカリキュラム」。九回目となる今回は平成二五年十一月二十三日(土)、二十四日(日)に洋画コース、十一月三十日(土)、十二月一日(日)に日本画コースを、高知市文化プラザかるぽーと絵画室で開催しました。

洋画コースの講師は高知大学教育学部教授、美術教育西洋画担当の土井原崇浩先生。「人物デッサン画の制作」の講座を行い、土井原先生の丁寧な直接指導により、受講生の皆さんは素晴らしい作品を描き上げ「とても勉強になった」「デッサン力が上がった気がする」と充実した時間を過ごされた様子でした。

日本画コースの講師は高知大学教育学部講師、美術教育日本画担当の野角孝一先生。講座の内容は「裏彩色を用いた日本画の制作」で、和紙の裏側から絵具を施すという特殊な技法を学びました。初めて体験する受講生も多く「予想していない効果があった」「固定観念を壊すことができた」など、新鮮な驚きと楽しさを得ることができたという感想をいただきました。

(受講者数・二十四名)



特殊な技法「裏彩色」を学ぶ (日本画コース)

ワールドミュージックナイト

VOI・14



平成二五年十二月八日、高知市文化プラザかるぽーと小ホールにおいて、ワールドミュージックナイトVOI・14を開催しました。この公演は市民組織「国際的な音楽交流を中心を高知を楽しくするプロジェクト」と協働で開催しているコンサートシリーズで、世界の音楽と食べ物と一緒に楽しめるというコンセプトで行っています。

今回は本シリーズ三度目の出演となる南米フォルクローレグループ「WAYNO(ウエイノ)」の演奏をお届けしました。ペルー、チリ、アルゼンチン、日本と、国籍も音楽のバックボーンも異なる五人のメンバーで構成され、結成から二十四年というキャリアを誇るWAYNOですが、その円熟味を帯びた演奏の中に小さな火が灯り、その熱が少しずつ客席にも伝わっていき、じつじつと、しかし確実にお客さんの心をつかむような素晴らしいパフォーマンスでした。

また今回はスペシャルゲストとして、ボリビア民族舞踊団「バレエ・ポリヴァール・ナゴヤ」とのコラボレーションも実現しました。カラフルな民族衣装に身を包んだダンサーたちの踊りはとてもエネルギッシュで、アンコールでは客席を巻き込んでの盛り上がりとなりました。

(入場者数・百五十七名)

演出家・俳優養成セミナー2013
演劇大学inこうちvol.3



宮田慶子、謝珠栄、鄭義信など、演劇界の第一線で活躍する総勢10名の講師を招き、演劇に関する様々なワークショップを行います。初心者大歓迎!是非ご参加ください。そして、10日は蛸蔵、13日はかるぼーと大ホールで発表会を開催します。発表会は入場無料!演劇の世界に浸ってみませんか。

【日 時】2014年1月9日(木)~2014年1月13日(月・祝)
【会 場】1月 9日・10日 蛸蔵
1月11日~13日 高知市文化プラザかるぼーと
【発表会】1月10日(金) 20:00~ 蛸蔵
1月12日(日) 12:30~ 高知市文化プラザかるぼーと大ホール
1月13日(月・祝) 15:30~ 高知市文化プラザかるぼーと大ホール
【申込・問】各ワークショップは、内容・時間・参加費が異なります。詳細は、高知市文化振興事業団へお問い合わせいただくか、かるぼーとのホームページをご覧ください。

風 伯

孤独死でいいではないか

いけないう「孤独死だけは避けたい」という願いのようなものがある。社会風潮として、「孤独死だけは避けたい」という「証明」といった考えがあるようだ。でももしかして、孤独死はそんなに惨めなものだろうか。私の友人は県外に住む兄弟や子どもたちも加わって、看病

孤独死が新聞や雑誌で頻りにとりあげられるようになって随分経つたように思う。東日本大震災をきっかけに地域でのつながりや人々との絆がまた騒がれた。美人女優の大原麗子の「孤独死」で、絆やつながりが大事だという論調もすでに四年も前のことになる。最新の日の迎え方について「独り

や介護に奔走していたが、タイムミンク悪く最期には親を独りで死なせてしまったと嘆く。結局「孤独死ではないが、傍に居てあげられなかった」ことを悔やんでいるのだ。

別の友人は、介護者がいないから親を施設に預けていたが、最期に病院で息を引き取る時、たまたま遠く離れた住んでいた兄妹や子ども、別れた妻にまで傍に付き添ってもらった形でお別れができた話していた。そんな話が聞こえてくる歳になったのだろうか、両者にどれほどの差があるのだろうかと思ふ。

あまりに「孤独死」を畏れ過ぎてはいないか。誕生の時と同じように死ぬことも独りだと、「覚悟する」ことを訓練しておくべきではないか。自分のペースで最期を締めくくれるのはむしろありがたいのだと、そんなメンタルトレーニングがいま欠かせないのだと自分に言い聞かせている。(林)

第9回美術作品コンクール

CONCOURS
des
Tableaux

応募作品展



高知市文化振興事業団は、若手の美術作家を支援・育成することを目的に第9回美術作品コンクールを開催します。

最終日には、キュレーターで筑波大学芸術系准教授の窪田研二氏による作品講評・公開審査が行われます。若手作家のエネルギーあふれる作品をぜひご鑑賞ください。

平成26年
1月21日(火)~26日(日)
10:00~17:00
公開審査・講評 26日(日)14:00~
高知市文化プラザかるぼーと
7階市民ギャラリー
第1・2展示室 入場無料

【お問い合わせ】
高知市文化振興事業団 TEL088-883-5071

今号の表紙

「はなつゆ」

古味 望

まだ寒い一月、二月頃でも蜜を求めて飛び回るメジロを見ると春の訪れがもうすぐだと感じられます。

炬燵でぬくぬくするのも良いですが、外に出て春の訪れを探してみるのも良いのでは?

(こみ のぞみ/
国際デザイン・ビューティカレッジ1年生)



①



②

高知を撮る

第29回写真コンテスト入賞作品

仁ノのどんと焼き(2枚組) 八井田 晋

(平成14年1月27日 春野町仁ノ海岸)

①正月飾りがピラミッドのように高く積み上げられ、燃える火で竿の先につけた餅を焼き、それを食べて幸福万来を祈願した。
②庄巻は鳥追いの踊り子たちが波打ち際で「仁ノおけさ」をにぎやかに踊った。時代と共に消えてしまった情景がなつかしい。

昨年秋、高知に縁のある漫画界の重鎮・やなせたかさんが逝去された。思い出を少し……
今から十年程前、番組を制作するため東京のアトリエを訪ねた。アンパンマンの魅力の話に及んだ時、やなせさんは、「世界で最も弱いヒーロー」と言っていて笑って見せた。「ヒーローが、相手が困っているからと言って自分の顔をあげないでしょ。それに水をかけられたらものすごく弱い。でもね、この弱さがいいんだよ。」確かに、日本のアニメにしても、ハリウッドの映画にしても、ヒーローは滅茶苦茶強い。弱いヒーロー……なんだか身近に感じる。

弱いヒーロー



風俗歳時記

さらに続けて、「アンパンマンは、子ども向けの漫画だと思ってるでしょ。それが違うんだよね。僕は、アンパンマンをお年寄りに向けて描いている。だって赤ちゃんや幼児が自分でテレビをつけたら、本を見たりしないでしょ。お爺ちゃんお婆ちゃんの上で一緒に見る。だから、セリフも子ども向けでは

なくて大人と同様の難しい言葉を使ってる。」と確かな口調で話した。アンパンマンはお年寄り向け漫画……なるほど。
強いヒーローに寄り添うことは、保身のためには大切なことかも知れないが、本当に心を通わせるには弱いヒーローの方が心を聞きやすい。イソップ寓話の「北風と太陽」のお話のように。一方、子どもたちに見せたいものは、まずは大人の心をつかまないとけないということだ。県内の文化施設の企画事業立案の際にも、この考え方は参考に

なるのではないかな。やなせさん八十代の頃、失礼にも今後やりたいことを聞いてみた。「これから、明日の命がわからないのに、目標なんてないよ。今を懸命に生きるだけだよ」とさりとら口にした。誰もそんなに強くない。私たちが肩肘張らず自然体で生きてみたい。弱いヒーローでいいような気がする。(立花香)

第24回

高知出版学術賞

推薦募集

優れた学術研究の振興は、

文化や出版の向上のみならず、広く高知県の発展に貢献します。

「高知出版学術賞」は、当該年における

最も優れた学術出版を顕彰することによって、

学術研究の振興を図ることを目的としています。

該当図書について、皆様のご推薦をお待ちします。

【対象】

次の事項をみたすもの。

- 1) 高知県内に在住する者の学術的著述、または、県外在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。
- 2) 2013年(平成25年)1月1日から12月31日まで(奥付の日付による)に発行された単行本。

【推薦】

自薦・他薦を問いません。

必要事項を所定の推薦書に記入し、該当図書3部を添えて審査委員会へ提出して下さい。

(図書は、申し出により審査後に2部まで返却します。) 受付締切 1月31日(金)

【表彰】

3点以内とし、それぞれの著者または編者に賞状と賞金10万円を送ります。

要綱・推薦書をご希望の方にはお送りします。

推薦書は当財団のホームページからダウンロードできます。

【推薦・お問い合わせ】

高知市文化振興事業団 内
高知出版学術賞審査委員会 〒780-8529 高知市九反田2-1
電話 088-883-5071 e-mail kikaku@kfca.jp

第30回

写真コンテスト・高知を撮る



第29回「記録写真部門」昭和以前の部
準特選
一宮小学校 楠瀬幸陽

どなたでも、一人何点でも応募できます。出品料無料

応募締切

1月31日(金)

発表 3月上旬

過去から現在に至る高知県内の出来事や風景、人々の暮らしを記録し、郷土の様々な表情を伝えるとともに、未来の高知のあるべき姿を考えていこうというものです。優れた作品は、入選作品展にてたくさんの方にご覧いただけます。

テーマ

●記録写真部門

記録性を持った高知県に関する写真

- ①平成の部(平成時代に撮影されたもの)
- ②昭和以前の部(昭和以前に撮影されたもの)

賞

特選 2点(賞状・賞金3万円)
準特選 10点以内(賞状・賞金1万円)
(各部門とも)

●I LOVE 高知部門

好きな高知の風景・風俗等を表現した写真
(1年以内に撮影)

入選作品展

平成26年3月18日(火)~23日(日)
高知市文化プラザ 市民ギャラリー 第4展示室

応募先

○高知市文化振興事業団 写真コンテスト係
(月曜休館。祝日の場合は開館)

〒780-8529 高知市九反田2-1

電話 088-883-5071

作品受付は8:30~20:00

- カラー・モノクロともにワイド四ツ切サイズ(254mm×365mm)以上
 - 組写真は3枚までで、写真の順番と組写真であることを明記して下さい。
 - 商部門ともパネル貼りは不要です。
- 詳しい応募要領は高知市文化振興事業団までお問い合わせ下さい。

作品募集



第29回「I LOVE 高知部門」
準特選
天空への輝り参道 北村健三